

西山 陸先生 選

特選第一席	四四八	砧打つほどに体のぬくもりぬ	塚本 治彦
特選第二席	八八四	少年の兄は海より茄子の馬	佐藤 みね
特選第三席	三〇三	行き先はローマと決めてなめくぢり	小田島 渚
秀 逸	四三	母が手にしたる鍬あり春の風	大和 昭彦
"	二一七	朝凧に妻も漁師や舳ひ解く	村上つね子
"	三一〇	草匂ふ父の生家やかたつむり	倉基七三也
"	六三〇	初陣の青毛を誉めて馬冷す	安達 朝子
"	九八九	首振つてばさつとほどきし祭髪	大友セツノ
入 選	五一	船で行く島の谷間の田植かな	藤野 尚之
"	一七二	生類の無二の惑星滴るる	小栗不死実
"	二八〇	多賀城の星の沸き立つ祭笛	関口 幹雄
"	三三一	南門を潜れば古代秋桜	鈴木 弘子
"	三八七	鰯雲終着駅の先は海	渡嘉敷五福
"	四三〇	船頭の手折るひと本蓮見舟	小野 雅子
"	四六一	梅雨出水その一滴を怖れけり	堀籠 政彦
"	六三六	瀬戸市の甕に銭鳴る秋気かな	安達 朝子
"	七二八	ドロップのバラの香りや終戦日	神野礼モン
"	八八九	また遺構増やす人類終戦日	小野 豊

成田一子先生 選

特選第一席	一一〇四	朝顔ひらくはじめて海を見るやうに	大久保和子
特選第二席	一〇四五	海へ向く鞆風が乗るばかり	山岸 修次
特選第三席	一一九八	髪洗ひまた確かめる避難地図	穂苅 真泉
秀 逸	四六二	推敲の飛躍うながす扇風機	堀籠 政彦
〃	五三六	緑蔭の深きに溺れる余生	吾 亦 紅
〃	七四九	綻びの世を縫うように大蛸	高橋 薫
〃	八一〇	ひよめきの正しき鼓動稲の花	上田由美子
〃	二三六	蕎麦の花村はゆつくり老いにけり	日下 節子
入 選	一七二	生類の無二の惑星滴るる	小栗不死実
〃	二二七	夜濯ぎやティッシュの浮かぶりーバイス	菅原 和子
〃	三六八	噴水やふいに止まりて人散りぬ	小村 寿子
〃	四三三	百畳のにしん御殿の夏座敷	種ヶ嶋美節
〃	五三一	魚屋の残る旧道岩清水	加藤 雅流
〃	六六六	山の端の明るみて果つ遠花火	田中 久幸
〃	六八九	藻の花や青空分けて鯉の口	吉岡 桂子
〃	九五八	正座する骨の音して夜の秋	土屋 遊螢
〃	一一六六	水瓶の藻草の森の目高かな	高宮 義治
〃	一二三一	少年に咬傷のあと終戦日	相原 光樹

高橋健文先生 選

	特選第一席 一一〇四	朝顔ひらくはじめて海を見るやうに	大久保和子
	特選第二席 六四九	終戦日母は生涯化粧せず	千葉ぐんじ
	特選第三席 九〇七	みちのくの脊梁山脈秋の蛇	坂下 遊馬
秀	逸 二六一	梅筵仕舞ひ女は旅に出る	野中 憲子
	四五八	痛みとは伝はり難し凌霄花	寺内 由美
	五二三	風入れの原爆名簿に新たな名	滝代 文平
	六九八	碑を時雨の傘に入れて読む	井上 燈女
	八〇七	妻とほぼおなじフォルムや竹婦人	梅田 昌孝
入	選 四〇	原爆忌水琴窟のひとしづく	佐藤 頼夫
	三四〇	慰霊碑は津波の高さ浜防風	丸山みづほ
	三五八	みんなみや民意はどこに置いて来た	平塚 孝子
	四〇一	大西日彼の世の端の鯨幕	佐藤 みね
	四八五	消えやすき記憶の欠片酔芙蓉	松原 君代
	五〇一	蟬時雨灼ける地球となりにけり	石の森市朗
	五七二	其の事を語らぬ人の広島忌	小室美紀子
	八五九	蝶の羽化空の深さを知らざりき	山本 峰子
	一〇三二	青葉木菟眠れば闇が匂ひ出す	土見敬志郎
	一一三六	蕎麦の花村はゆつくり老いにけり	日下 節子

高野ムツ才先生 選

特選第一席	六〇〇	いわし雲昨日も明日も遠きもの	大河原真青
特選第二席	八七九	揚花火海へ還って行くばかり	田村 慶子
特選第三席	一一〇四	朝顔ひらくはじめて海を見るやうに	大久保和子
秀 逸	二六七	捻花のねぢれの先に未来あり	堀 和久
〃	二九六	赤腹やぽつかりとまた雲を喰む	長山 信行
〃	六〇一	手のひらのおかめどんぐり遠い空	大河原真青
〃	七六一	鯉跳ねる汽水の町は地図にのみ	土屋 遊螢
〃	一一七七	田植うた鬼籍の父が耳すます	蘇武 啓子
入 選	三四	胎の子は今これほどとさくらんぼ	今井 文雄
〃	一四二	ポプラの木いつも風ある薄暑かな	赤間 学
〃	四九八	山の端に夕日とどまる残暑かな	櫻井アエコ
〃	五四九	釣瓶落し電話ボツクス失せし街	菊地みさ子
〃	五九六	親牛の仔牛を舐るみなみかぜ	大河原真青
〃	九〇七	みちのくの脊梁山脈秋の蛇	坂下 遊馬
〃	一〇〇九	壺の碑は征夷のひとつ茨の実	鎌倉 道彦
〃	一〇二五	遠汽笛暮れる残暑の捕鯨町	木村螢雪子
〃	一〇四七	阿弋流為の口一文字朴の花	鹿目 勘六
〃	一一三六	蕎麦の花村はゆつくり老いにけり	日下 節子